劇場便り 35

ブレーマーハーフェン　　志賀トニオ氏

今シーズンはMusiktheater（音楽部門）の最初の演目はプッチーニ作曲の"トスカ"だったのですが、そのプレミエが近づいた頃にそれと並行して私の指揮者としてのプロダクションであるミュージカル"Spamalot"（スパマロット）の稽古が始まりました。

この"並行して始まったと"いう所が実はポイントで、今回のミュージカルは今までのようにMusiktheaterのプロダクションではなく、初めてSchauspiel（演劇部門）のプロダクションとして上演する事になったのです。この作品はイギリスのコメディグループ、モンティパイソンの映画Die Ritter der Kokosnuss（日本では英語名のホーリーグレイルで知られている）を元に作成されたブロードウェイのミュージカルです。ということは、オリジナルでは当然ミュージカル専門の歌手が演じており、ソリストは男性７人、女性１人。アンサンブルは男性６人、女性６人で構成されていました。その後この作品はドイツ語版がケルンで初演されて大ヒットし、以降ドイツ中の劇場で上演されるようになりました。

出演者は歌って、踊れて、演技も出来る必要があり、ソリストによってその難易度にかなりの偏りがあるのが配役の難しい点となっています。例えば、ランスロット役は歌は簡易であるが騎士としての演技力が必要、ロビン役は歌と踊りに長けている必要等。その結果ドイツの劇場では、音楽部門、演劇部門、バレエ部門が内在している為、それぞれの部門から役に合った人を配役するようになりました。そしてブレーマーハーフェン歌劇場では、ソリスト８人全員を演劇部門で配役し、アンサンブルを音楽部門の合唱団で、そしてそれとは別にダンサーを市内のダンススクールから１０代の女性達をオーディションで採用する事になりました。合唱団は２０名、ダンサーは８名ですので、オリジナルよりもかなり大人数となりました。

人数が多い方が舞台映えし易いので、出来上がりを考えれば良い事なのですが、仕事量は増えるので大変です。そして指揮者としての大仕事は、ソリスト８人の俳優達を歌えるようにしなければならない事でした！そこでさっそく昨年の３月に彼等との音楽稽古を始めました。俳優の多くは楽譜も読めませんから、何度も旋律をピアノで弾いて、聞いて覚えてもらったり、録音してもらったり。こういう時には、日本にいたときにアマチュアの音楽家を指導した経験が非常に役立ちました。唯一の女性役は作品中最も歌唱力が必要なのですが、彼女の為には特別に本場ブロードウェイの歌手に特別レッスンをお願いしました。その歌手は先シーズン、私のプロダクションのミュージカル"ヘアスプレー"に出演していたので、その機会を利用しました。こうして少しづつ稽古を進めていけたのですが、４月下旬から演劇部門の重要な演目の稽古が始まり、新シーズン開始以降も別の演目の稽古がびっしりでなかなかスパマロットの稽古時間を取る事ができませんでした。幸い合唱団には時間的余裕があり、彼等との稽古を進める事が出来ました。

そして９月下旬、いよいよスパマロットの立ち稽古開始です。そしてさっそく問題発生。当初合唱団が参加する予定であった騎士達のシーンは、予算の関係でその数の衣装を作れないとの事で、男性ソリスト６人だけで行って欲しいとの事。騎士達のシーンは３声部に分かれる箇所で歌うのが難しく、合唱団に頼っていたのでした。それからは毎日のように俳優達とその箇所の稽古をしたのですが、やれどもやれどもできるようになりません。一人で歌えても、他の人が別の声部を歌うと、つられてそちらの声部を歌ってしまうのです。しかも同時に難しい振り付けもこなさなければなりません。それでも諦めず、稽古の仕方を工夫して少しづつ形になっていきました。合唱団も苦手の踊りの振り付けを覚えていきましたが、こちらも時間との闘い。ダンススクールのダンサー達は検討していましたが、急遽まとめ役として劇場のバレエ団から助っ人を呼ぶ事に。こうして山あり谷ありのプロダクションでしたが、最終的には俳優たちの演技力の高さが光り、合唱団が音楽面でサポートし、ダンサーのフレッシュな息吹と、そこにオーケストラのサウンドが融合し、大変楽しく且つ聴き応え、見応えのあるプロダクションとなりました。